

# 家族の立場で見た医療・介護現場

今回は両親の入院、施設入所から感じた医療・介護現場について紹介します。

両親は、先日の西日本豪雨で度々ニュースに登場する愛媛県の小さな町(市)に2人で生活していました。父はパーキンソン病を発症し10年、要介護3で90歳、母は膝は悪いものの何とか自立で87歳、様々な介護サービスを利用し老々介護をしながら生活をしていました。今年3月下旬、母の膝が悪化し歩くのもつらくなり、膝の手術を決断しました。その為に、父は偶然にも受け入れてもらえる老健が見つかり入所しました。

こうして4月下旬に母は入院(現在はリハビリ病院に転院)、父は老健入所という状態となりました。実はこの病院と老健の職員の方の対応に大きな違いを感じています。

まず病院の看護師・PT・SWは常に母の状況を把握しておられます。電話で母の訴えを伝えたり、足の状況やリハビリの状況を聞くと、的確な答えが返ってきます。おそらくは、机上のパソコンの情報をみて答えておられると思いますが、病院内で情報共有がされていることを感じます。更に、電話の後で自分の目で母の様子を確認したり、リハビリ担当に聞くなどして、改めて報告を下されることもあります。

一方で、老健のケアマネジャー・生活相談員の方は、「様子を見ていないのでわかりません。フロア担当にかわりましょうか?」と言われます。

更に面会訪問時に、背骨が曲がり体が傾いている父が必至の思いで車いすを自走して食堂についた時、「垣内さん待ってましたよ」など明るい声掛けがほしいと思うのですが、スタッフの方々は黙々と食事介助をしておられるという様子に家族としてがっかりします。作業をしておられるなど感じます。

病院と老健の違いということではなく、それぞれの部門のスタッフが情報共有できるしくみができているか、常に状態や様子を観察し認識しているか、そして患者や入所者に常に気持ちに向いているかという事が大切ではないでしょうか。

実は母が入院している病院は、10年ほど前に母が私が要介護になった時入れてほしい施設1位と言った介護施設と同じグループ法人が運営しています。そして、父が入所している老健は、母がここだけは入れてほしくない最下位といった施設のグループ法人の運営です。

当時、母になぜそう思うのか聞いたところ、1位の施設は「訪問時に事務所の方がいつも笑顔で挨拶してくれるし、面会中に部屋の外から聞こえる介護スタッフの声掛けがやさいから」でした。一方で最下位と言った施設は、「訪問時に事務所の方の挨拶がない。面会中に部屋の外から聞こえる介護スタッフの声掛けが冷たい」でした。

田舎町なので、子供は都会に行き高齢者ばかりが残っていて、施設入所者に面会に行く人が少ないので、親戚や知り合いの面会に毎月訪問していた母が感じた施設のあり様です。

更に、幼馴染に母の意見を伝え、実際の町の評判はどうか聞いたところ、「お母さんの言うとおり。1位の施設はとても評判が良く順番待ちでなかなか入れない。最下位の施設は、評判がとても悪い。」とのことでした。



垣内イスズ